

# 國學院大學學術情報リポジトリ

国語動詞の抽象語義化現象略史：  
何がこのような語義を派生させるのか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 幸弘, Nakamura, Yukihiro メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000668">https://doi.org/10.57529/00000668</a>

# 国語動詞の抽象語義化現象略史

—何がこのような語義を派生させるのか—

中村幸弘

## 一 語彙学習の一小試論から

語彙学習を、例えば文法学習や漢字学習のように体系化する試みは、今ではこの世界の古典となっている。

そう書き出したのは、四十年近く前の、「学図教材研究 国語 [中学校編] No.66」の、「語彙学習法 小試論」<sup>1)</sup>においてであった。新学習指導要領に言語事項が掲げられて、その領域を担当する編集委員として、同社の検定教科書が既に幾つかの学習アイデアを採用しており、今後いつそうその開拓に努めていこうとする姿勢を述べたものである。そこに引いた【練習】の二形式が、次の問いである。

次の傍線部の動詞について、その用法の違いを考えよう。

a 愛におぼれる。

b 水におぼれる。

(第二学年【練習】4)

右の教授資料において、bが具体的動作をいう「おぼれる」であるのに対して、aは、目に見えない精神面での心の動作を表しているなどという解説を施したうえで、転義の背景に触れたりもしてきているが、最も注目させたいところは、語義の抽象概念化であった。目に見えない動作をどう理解させるかが、

この【練習】を設ける所以であった。

それとは別に、まったく同趣の、この国語動詞の問題についてだけに絞って、「語彙学習への一試論——特に派生語義動詞の場合」<sup>3)</sup>という報告をしていた。『角川国語辞典新版』(久松潜一・佐藤謙三編/昭和四十四年)の編集協力の作業を課せられ、殊に、派生語義用法ブランチに短語句用例を語釈の後に書き込む作業を重ねるなかで気づいた傾向であった。そこにいう派生語義とは、抽象語義化した語義のことであった。現代語としては、それら動詞の上接助詞が格助詞「が」と係助詞「は」「も」などともなるものと、格助詞「に」となるものと、格助詞「を」となるものとに三分類されて、しかも定着していて、それら各動詞が具体的な用法の場合と抽象的用法の場合とで、それら助詞の上にとどのような名詞が配されるかが、自然と見えてきたのであった。

当時、語彙学習というと、直ちに照合して確認する聖書が、阪本一郎『教育基本語彙』<sup>4)</sup>であった。筆者の場合も、小学校低学年語彙・小学校語彙・中学校語彙の別に則っての、いわゆる学年配当なども加えての、抽象語義化動詞を、上接助詞と、さらにその上の名詞群とによって学習する一覧表が自然と作成されていた。上接格助詞が「に」「を」となるものは、その定着

度が高く、二格・ヲ格と呼んで取り扱った。ガ格だけでなく、柔軟に「は」「も」などでも表現される、その一群は、0格と呼んで整理した。そのように整理する契機を与えてくれた論考は、白石大二「基本語彙設定以前の問題」<sup>5)</sup>であった。

その後、その0格・二格・ヲ格直上の名詞群と、その各動詞の抽象語義化現象の初出年時とを、いつか追跡していたようである。殊に、『日本国語大辞典第二版』<sup>6)</sup>が出典文献の成立年を表示してくれてあったところから、その一覧三表には、その書き込みが、これまた、いつか、始まっていたようである。時代区分については、私わたしかに自身で作成した手造り国文学史・国語史時代区分表に、<sup>7)</sup>これも、いつか、拠っていた。現代を第二次大戦後にしようとしたところから、近代が大正と昭和二十年八月十五日までを含むことになってしまっていた。

あまりにもアバウトな国語年表であるが、活かせるところあるものと自負している。研究というには当たらないメモであり、0格とする取り扱いへの、一般の理解のしにくさ<sup>8)</sup>もあって、0格・二格・ヲ格の別は、A群・B群・C群とすることとした。『教育基本語彙』の学年段階別や、自・他の転換/慣用表現としての定着度/シチュエーションの特殊性などの備考欄については、今回、小稿としては、これを除くこととした。具象的用

法の場合と抽象的用法化した場合とが直ちに見えてくるよう、そのシフト化に努めた。五十年を越えて書き留め書き改めしつづけてきたA群・B群・C群の各便覧である。

## 二 国語動詞の抽象語義化現象略史便覧

抽象語義化現象を見せる国語動詞の整理については、直上に配される格助詞「に」「を」の上に位置する名詞を観察することによって、具象的用法用例と抽象的用法用例とを識別することが適切であると判断された。さらに、上接する助詞が格助詞「が」や係助詞「は」「も」等であるものもあつて、それらもその上の名詞を観察することによって、その用法の別が識別できた。今回、その直上助詞が格助詞「が」や係助詞「は」「も」等でもあるものをA群とし、直上助詞が格助詞「に」であるものをB群とし、直上助詞が格助詞「を」であるものをC群とすること、既に述べたところである。

さて、そのA群・B群・C群の各一覧表は、いずれも、抽象語義化現象を見せた国語動詞で、具象的用法の場合と抽象的用法の場合とで、その助詞の上の名詞がどのように相違するかを示したものである。その名詞は、現代語として適切と思える名詞を筆者の判断で示したもので、それに相当する用例が初出用

例として登場する時代を『日本国語大辞典第二版』の用例によって確認して示したものである。

『日本国語大辞典第二版』における語義ブランチのあり方が、すべて、語義の抽象化に向けての転義を配慮しているわけではない。そうではあるが、相応に、その抽象語義が読みとれた語義ブランチの番号を、念のため、抽象語義ブランチ欄を設けて引いておくこととした。また、抽象語義が性格を異にする場合もあるところから、便宜的に1・2の番号を付し、初出時代の違いや辞典ブランチの違いなどと照合できるようにした。さらに、また、抽象的用法用例がまったく引かれていない場合や、抽象語義についてまったく触れていない場合については、抽象的用法の初出時代の現代欄や抽象語義ブランチ欄に※印を入れておくこととした。

小稿は、掲げた題目に相当する報告としては、以上で終了したことになる。したがって、小稿の目的は、その三表を、未完といつてもよいその三表を公開することであり、その目的は達成したことになる。そこで、以下は、A群・B群・C群の三表への収載を見送った用例や抽象語義化現象として認識された事例などあつて、若干の関連事項雑記のページとさせていただくこととした。

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	A
濁る	解ける	冷める	冴える	焦げつく	肥える	崩れる	燻る <small>くすぶる</small>	腐る	消える	傾く	潤う	疼く <small>うずく</small>	荒れる	抽象語義を併せもつ動詞
水	結び目・帯・紐 <small>ひも</small>	お湯・お茶	大気／月	ご飯・煮物	馬／土地	土砂・堤防	竈 <small>かまど</small>	魚肉	火・光	土塀・建造物	土壌・草木	古傷・足	海・山・風	具象的用法の場合の直上助詞「が」「は」「も」の上的名詞
○	○				○	○						○	○	上代
		○	○					○	○					中古
							○			○		○		中世
														近世
				○										近代
世の中／心	題 1 怒り／禁／2 数学の問	興	1 心／2 頭・目／腕	貸し金	目・舌	1 生活／2 秩序	不満・問題	性根／精神	嗜 <small>うわさ</small> ／憎しみ	齡 <small>よわい</small> ／家運	治体	ふところ・家計・地方自	心の傷・心	生活・会議・土俵
														抽象的用法の場合の直上助詞「が」「は」「も」の上的名詞
														上代
○	1 ○	○						○						中古
	2 ○		1 ○			1 ○			○	○			○	中世
				○		2 ○								近世
			2 ○		○									近代
							○							現代
②	1 ②・2 ⑦	③	1 ③・2 ④	②	④	1 ⑤・2 ⑥	④	⑥	②	③	③	②	④	抽象語義 ブランチ

8	7	6	5	4	3	2	1	B
輝く	赴く	溺れる	負う	訴える	打ち込む	飢える	喘ぐ <small>あえ</small>	抽象語義を併せもつ動詞
月光〔ガ〕	任地	水	荷物〔ヲ〕	苦痛〔ヲ〕・不満〔ヲ〕	釘〔ヲ〕・杭〔ヲ〕	食べ物	高熱	具象的用法の場合の直上助詞「に」の上の名詞
						○	○	上代
○	○	○	○	○				中古
								中世
								近世
					○			近代
希望／栄誉	快方	酒色	先学	武力・金の力	研究・事業	愛情／読み物	不況	抽象的用法の場合の直上助詞「に」の上の名詞
								上代
								中古
		○						中世
								近世
○	○		○	○	○	○	○	近代
								現代
④	⑤	②	③	④	⑥の□	③	②	抽象語義 プランチ

20	19	18	17	16	15
蘇る	舞い込む	降りかかる	閃く <small>ひらめ</small>	晴れる	弾む
死者	花びら・枯れ葉	雨・霰 <small>みぞれ</small>	稲妻	空・霧	ボール・鞠 <small>まり</small>
○				○	
		○	○		
					○
	○				
記憶	幸運	災難	インスピレーション	1 憂さ／2 嫌疑	声／話
				1 ○	
				2 ○	○
		○	○		
○					
	※				
②	※	②	④	1 ②・2 ③	④

24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9
呼びかける	漏れる	触れる	浸る	外れる	靡 <small>なび</small> く	飛びつく	飛び込む	据える	遡 <small>さかのぼ</small> る	漕 <small>こ</small> ぎつける	苦しむ	気 <small>か</small> 触 <small>ふ</small> れる	飢 <small>かつ</small> える	傾く	欠ける
級友	光〔ガ〕 〔ガ〕・ガス	髪・頬 <small>ほほ</small>	水	的〔ヲ〕	風	鉄棒	プール	電動機器〔ヲ〕	笛吹川〔ヲ〕	岸	持病	漆 <small>うるし</small>	食	西・南側	茶碗〔ガ〕 <small>ちawan</small>
		○			○			○	○		○				○
			○	○		○				○		○			
○													○	○	
○	○						○								
同志	選	1 核心 / 2 勘気	1 酒 / 2 懐古の情	人の道	威光	好条件	事件の渦中	会長	語源	就職・結婚	判別	哲学・ロック	愛	急進思想	人情 / 知性
					○				○						
		1 ○													
		2 ○	1 ○	○						○			○	○	
			2 ○				○		○		○	○			○
※	※					○									
②	④	① ⑥・② ⑦	②	③	②	②	③	⑪	②	②	②	③	②	④	⑤

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	C
捏 <small>こ</small> ねる	焦 <small>こ</small> がす	越 <small>こ</small> える	汚 <small>け</small> す	加 <small>く</small> える	配 <small>く</small> る	傷 <small>く</small> つける	築 <small>く</small>	帯 <small>お</small> びる	押 <small>お</small> される	操 <small>く</small> る	浴 <small>お</small> びる	与 <small>く</small> える	仰 <small>お</small> ぐ	抽象語義を併せもつ動詞
粘土・餡 <small>あん</small>	ご飯・煮物	峠 <small>とうげ</small>	聖域	三個 <small>さんご</small>	贈り物	肌 <small>は</small> (ニ・ヲ)	城・砦 <small>とりで</small>	劍	ドア	指人形	水・日光	賞品・お小遣い	天	具象的用法の場合の直上助詞「を」の上の名詞
		○	○	○	○		○		○			○	○	上代
	○								○		○			中古
○						○								中世
														近世
														近代
理屈	胸の思い	1師 / 2矩 <small>のり</small>	名誉・体面	危害	気・心	名誉・家名	富・財産 / 地位	使命	興奮・怒り	人 / フランス語	非難・罵詈雑言 <small>のりぞろえ</small>	恥辱・損害	命・指示 / 援助	抽象的用法の場合の直上助詞「を」の上の名詞
														上代
	○	1 ○	○		○							○		中古
									○	○			○	中世
○		2 ○												近世
				○		○		○			○			近代
							○							現代
③	③	1 ⑥・2 ⑦	②	⑥	②	②	③	③	②	④	③	②	③	抽象語義 ブランチ



30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	
垂れる	辿る <small>たど</small>	焚きつける	育てる	削ぐ <small>そ</small>	濯ぐ <small>すす</small>	退く	絞る	敷く	覚ます	支える	叫ぶ	探る	肥やす	込める	零す <small>こぼ</small>	
滴〔ガ〕	山路 <small>やまじ</small>	火	子ども・犬	竹	洗濯物	後ろ〔へ〕	雑巾	布団	目	倒れそうな屏	妻の名	ポケット	家畜／土地	弾丸	水	
○						○		○	○		○	○				○
	○	○		○	○		○			○			○	○		
			○													
教え・範	破滅への道・孤立化	学生	公德心／地域の産	1 敵の勢い／2 感興	汚名	官・会長	1 知恵／2 犯人	戒厳令／共和制	迷い	一家の暮らし	原爆禁止・無罪	敵情	目／私腹	心・思い	愚痴	
									○					○		
					○		○						○			
		○								○		○				
○				○			1 ○ 2 ○ ○	○								○
	※		※								※					
③ の □	⑪	②	②	1 ② ・ 2 ③	④	③	の ① ② □ ⑦	④	②	③	③	③	③	②	③	

44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31
招く	穿る <sup>ほじく</sup>	振り回す	塞ぐ <sup>ふさ</sup>	含む	翻す	剥ぐ <sup>は</sup>	乗り切る	縫う	並べる	舐める <sup>な</sup>	綱い交ぜる <sup>ま</sup>	唱える	繕う
客	土／穴	天秤棒 <sup>てんびんぼう</sup>	穴	水分	国旗	獣皮	怒濤 <sup>どとう</sup>	着物・綻び	商品	飴 <sup>あめ</sup>	糸	念仏	鉤裂き <sup>かぎさ</sup>
○			○			○		○	○	○		○	○
				○									
		○			○								
	○						○				○		
災い・不幸	他人の私生活	知識／仕入れたばかりの	責め	憂い	前言	官位	難局・不況	人波	不平・愚痴	辛酸	虚実	世界平和・地動説	人前・その場
○			○			○							○
					○								
				○		○							
	○	○						○		○			
							○				○	○	
③	②	③	⑧	③	④	③	③	④	③	④	②	④	② ②

### 三 抽象語義化現象略史から外した国語動詞

「陥る」が「落ち入る」と同一動詞であることに、もはや大方が気づかなくなっているようか。『日本国語大辞典第二版』「おち・い・る」【陥・落入】のプランチの④の〈攻め落とされる／落城する／陥落する〉意は、既に具象的用法からは転じている用例と見なければならぬであろう。そのような過程を経て、いま、「自己嫌悪に陥る。」など、B群の一語と見てよい用例を見せるに至っている。「悪癖に陥る。」「孤独に陥る。」「マンネリズムに陥る。」など、用例に事欠かない。ただ、その具象的用法用例については、仮に例えば「川の深みにオチイル。」などといえたとしても、表記は「落ち入る」であろうか。

『大和物語』百四十七段は、津の国に住む女に言い寄る二人の男、菟原と血沼との話である。その時、女は生田川のほとりに平張を立てて住んでいた。女の親は、その川の水鳥を射当てる者に娘を差し上げると言う。一人は水鳥の頸を、一人はその水鳥の尾を射当てることになって、結局、二人とも、その川に身を投げた。「この平張は川にのぞきてしたりければ、づぶりとおち入りぬ。親、あわててさわぎののしるほどに、このよばふ男ふたり、やがておなじ所におち入りぬ。」とある本文の、その「おち入る」が、いま、抽象語義化している「陥る」の具

象的用法の用例である。現代語に、その具象的用法は残っていない。とすると、「川の深みに」には、「嵌る」などを当てることになるのであろうか。

現代語からその抽象語義化現象を認識していく基軸から外れることになるので、右用例のように、起点となる具象的用法用例が現代語に存在しない国語動詞については、それらを該当しないものとして外すことにした。

「予定が狂う。」(A群)／「計画に与る。」「暴力行為に及ぶ。」(B群)／「精神力を培う。」(C群)なども、同趣の事情で、取り立てることを見送った。

「狂ふ」の具象的語義(物の怪が)とり憑くも、現代語には残っていない。「与る」の具象的語義は(預けらる(現代語形Ⅱ預けられる)であろうが、そのような語義の用例は発掘されていない。「及ぶ」の具象的語義(腰をかがめ、手をのばして目標に届くようにする)も、現代語には残っていない。「培ふ」の具象的語義(根もとに土をかぶせて、草木を育成する)は認識していても、現代語にその用例を見ることはできない。

### 四 国語動詞の抽象語義化現象についての認識

小稿は、既に、国語動詞の大方は抽象語義化する傾向にある

ことを前提に、その上接助詞の上の名詞群を手掛かりに整理した一覧を報告してしまっている。具体的に、その該当用例を見ただけでも、その傾向は、現象と呼ぶに相当する実態を存在させているといえよう。

前章で取り上げた「陥る」は、現代語としては抽象概念動詞である。以下、旧稿に立項してあつて今回取り立てを見送った諸語も、同趣の事情によるものであった。そこには、古典語としての初期の語義がなお不明のものや、他動詞が自動詞化したものやなども含めているが、とにかく、古典語の段階では具象的用法のものが現代語としては抽象概念動詞となつてしまっている動詞群である。

国語動詞は、時に、語義の変化に併せて、語形の変化が生じていることもある。(出てくる)意の「出で来」は、語頭のイ音を落としてたりしながら「出来」「出来る」を経て「出来る」となる。そして、その「出来る」は、可能の意の「できる」ともなつていて、具象的用法から抽象的用法へと転義している。

そもそもが、意識的に造語されたといつてよい「来す」は、「来至る」が約音化した「来る」に対応する訓読語として誕生したもののようである。(来るようにする) (来させる)意の本来の語義の「来す」は、もはや現代語に見ることはできない。

現代の文章に見る「支障を来す。」が、急に登場したのではない。転義した、その転義の用法しか、いまは用いられていないのである。

そのように、国語動詞の抽象語義化現象は続いている。上代語から、もっぱら抽象的用法をしか見せないかと思える、例えば「思ふ」のような、心の動作をいう動詞もある。ただ、その「思ふ」も、上代語・中古語には、(顔つきをする)意の用法が残っていた。「小金門をかなとに物悲しらにおもへりし吾が子の刀あ自とじを」(万葉・4・七二三)の「おもふ」は、上接する「物悲しらに」を受けて、そういう(顔つきをし)ていた、と読んでいく用例で、具象的用法といつてよい用例である。「面おも」に「ふ」が付いたとする語源説はともかくとして、である。

国語動詞の抽象語義化現象は、国語現象のうちの注目してよい一つとして広く認識されていなければならないと思つている。

## 五 上代に抽象語義化していた国語動詞―漢字の抽象字義化用例だったか―

直ちに内省されたのは、上代に抽象語義化していた国語動詞は、上代までに抽象語義化していた国語動詞と、上代に至って抽象語義化した国語動詞とに、二分して取り扱わなければなら

ないということであった。しかし、それは、現存資料では叶わないことである。そして、永久に叶わないこともある。

さて、第二章の、その便覧を見たとき、該当する国語動詞は、「靡く」(B群) / 「込める(↓込む)」 「覚ます」 「繕う(↓繕ふ)」 「塞く(↓塞く)」 「招く」(以上、C群)の六語に限られた。そのうちの「招く」と「塞く」とについては、日本語以前の字義の問題かに見えてきたのである。「賢民を誅し殺すに由る故に、斯の禍を召(まねけ)り」(書紀・斉明六年七月(北野本訓))と「上は天の心に當ひ、下は民の望を厭(ふさい)たまへ」(書紀・顕宗元年正月(熱田本訓))とである。

その限られた資料の『日本書紀』訓読文の「召」字については、漢字の字義そのものに、既にそのような字義が存在していたのではないか、と思えてきたのである。その推測は的中して、「言有<sub>レ</sub>召<sub>レ</sub>禍、行有<sub>レ</sub>招<sub>レ</sub>辱」(大戴礼・勸学)が存在したのである。「召」字も「招」字も、ともに形声文字ではあるが、いずれも本来は具象的動作をいう動詞であったであろう。それが、早くも、抽象字義化していたのである。熟語「招辱(=辱めを受ける)」ともなっていたのである。書紀の原文「召<sub>二</sub>斯禍<sub>一</sub>矣」の「召」は、和語「まねく」をそう書いたのではなく、「受ける」意の字義どおり用いていたのである。

書紀の「民の望を厭く」は、広く浸透していた「塞責(=責めを塞く=責任を果たす)」の「ふさく」を文脈から「厭」字の訓読に用いたものであるのか。その「塞責」は、「故欲<sub>下</sub>以<sub>レ</sub>法誅<sub>二</sub>將軍<sub>一</sub>以塞<sub>レ</sub>責、使<sub>三</sub>人更代<sub>二</sub>將軍<sub>一</sub>、以脱<sub>中</sub>其禍<sub>上</sub>」(史記・項羽本紀)に見るところである。その「塞」字も、早くも抽象字義化していたのである。国語動詞の抽象語義化以前の、漢字そのものの、抽象字義化した漢字を採用した用例だったのである。

## 六 各時代の、国語動詞の抽象語義化現象の背景など、知りたいたいことも

小稿第二章の、その便覧は、なお、不備多いこと、いうまでもない。そうではあっても、相応に、国語動詞の、転義の大勢を知る手掛かりの一つとなるであろう。その抽象語義化用例が、どのような文種のどのような文脈で発生したのか、その契機は、言語文化史の大きな課題でもあろう。

前章でも見たように、上代に抽象語義化していた国語動詞は、六語であった。中古に抽象語義化した国語動詞は、十四語である。続いて、中世に抽象語義化した国語動詞も十四語であり、近世に抽象語義化した国語動詞は十五語であった。さらに続い

て、近代に至ると、その抽象語義化した国語動詞は二十八語数えられ、現代に抽象語義化した国語動詞は六語であった。恐らくは近代か現代かに抽象語義化したと思えて、『日本国語大辞典第二版』にその用例を見ることのない国語動詞が、他に六語あって、それが※印の六語である。

右の単純な実態確認からでも、近代という時代に、この国語動詞の抽象語義化現象が顕著であった、と見てよいであろう。外国語文化を受け入れた段階での何かと関係するのであるか。哲学であろうか、芸術であろうか、はたまた、自然科学であろうか。

その近代に、抽象語義化した国語動詞を多く見せるのは、B群の用例である。上接格助詞が「に」となる一群である。その用例の載る文種は、小説の類であろうか、評論・論説であろうか。また、翻訳であろうか、新聞・雑誌の記事であろうか。関係する調査など、進行しているのであるか。

抽象語義化現象と一概に呼んできてしまっていたが、その抽象語義化が二段階となっている用例も存在した。便覧のなかで、1・2のステップ表示をしてきている。それが、抽象概念化の深まりであるかどうかなども、その整理の待たれるところである。

極めて単純なことだが、複合動詞の抽象語義化用例も見られる。複合動詞そのものの登場の遅れもあつてか、その転義用例も近世以降のようである。

この便覧は、あくまでも、現存資料を『日本国語大辞典第二版』が登載してくれてある、その用例に即している。したがって、古いところでは、C群の「覚ます」のような事例にも出会うことになる。具象的用法の用例は中古が初出であるのに、抽象的用法の用例が、上代から存在することになってしまうのである。抽象語義化した（正氣に戻す）意の「覚ます」の用例「葉師求む良き人求む」（仏足石歌（三〇三頃））を見るのに、本来の具象的用法の用例は、「睡を解（さまさ）むと欲するをば除く」（石山寺本大般涅槃經平安初期点（八〇〇頃）一二）が初出となっていたのである。資料は、たまたま残ったものでしかないのである。

## 七 何がこのような語義を派生させるのか

旧稿「語彙学習への一試論―特に派生語義動詞の場合―」執筆段階から、何がこのような語義を派生させるのかについて触れようと思いつながら、適切な術語化に不安があつたり、認識に迷いが繰り返されたりして、実は、回避したり放置したりした

ままとなっている。ここに告白して、なお、今後とも、その解に努めたいとは思っている。

その旧稿の契機となった白石大二「基本語彙設定以前の問題」は、どのような点で契機となったかという点と、動詞が取る格助詞との関係を、0 格・ガ格・ニ格・ヲ格として取り扱う点であった。そこに新鮮さを感じてのことであったが、その 0 格・ガ格の別が判断できていないのに、小稿にいう A 群を 0 格としてしまっていたのである。いずれにしても、それら派生語義動詞は、上接格助詞が抽象的語義という点で共通する名詞・名詞句（連体修飾語を冠した名詞）を受けていたのである。英仏語だったら、抽象名詞という術語をもっていえるであろうが、国語の場合、そこをどう呼んで取り扱うかでも悩まされた。

小稿にいう国語動詞がそのように抽象概念語義を派生するのは、上接格助詞が抽象概念名詞・名詞句を受けて、それに続く国語動詞が短語句を構成したときに生じる現象ということになるのか。抽象概念名詞・名詞句が格助詞を伴って、それに続く国語動詞を抽象概念化させた結果が、この国語動詞の抽象語義化現象であった、と感じとっている。<sup>10</sup>そして、いつか、その現象がいつから始まるかを整理したくなっていたのである。

## 八 あえて国語動詞といった理由

近年、殊に、和語動詞について、そのように国語動詞と呼んでしまっている。国語科検定教科書巻末の、あの動詞の活用表が、そう呼ばせてしまっていたのである。国語と日本語との概念の違いを厳密に意識して使い分けて、そのうえで、国語動詞といっているわけではない。日本語の動詞というと、漢語サ変複合動詞とカタカナ外来語サ変複合動詞の使用率が急激に高まっているかに思えたからである。まさに、「非動作性二字漢語／訓なし一字漢字／カタカナ外来語略語形＋接尾辞「化」サ変複合動詞の時代―連体修飾語としての「欲望する」「塑する」「キャラ化する」<sup>11</sup>」である。因みに、そこに引く、その異なり語数は六九八四語であった。あえて国語動詞といった理由は、あえて日本語動詞といわなかった理由でもある。

注

(1) 拙稿「語彙学習法 小試論」〔学図教材研究 国語 中学校編 No. 66〕(昭和五十九年)。

(2) 「おはれる」の抽象語義化用法の用例としては、「酒色におはれる」などのほうが適切だが、中学校教科書教材ということもあって、「情におはれる」などを経て、この「愛におはれる」となったように記憶し

ている。思い出の一用例である。

- (3) 拙稿「語彙学習への一試論―特に派生語義動詞の場合―」(國學院高等學校紀要)第九輯・昭和四十二年。
- (4) 阪本一郎「教育基本語彙」(牧書店・昭和四十年)。
- (5) 白石大二「基本語彙設定以前の問題」(國語学会編輯「國語学」53―特集 語彙―/昭和三十八年六月)。
- (6) 『日本国語大辞典第二版』(小学館・二〇〇〇～二〇〇二年)。その語義ブランチの配列が派生順を意識しており、その出典文献の成立年も記入されているところから、これらを語彙学習に活用できないかと思うようになったようである。小稿第二章の便覧は、いつか、そこから作成されることになった。
- (7) 直接関わった検定教科書付録の文学史年表も、結局は、政治史の時代区分を借りたものでしかなかった。編集委員としてお手伝いしていた旺文社『国語辞典』(第八版/一九九二年)が、巻頭に国語年表を取りめることになったが、時代区分の境界年は、やはり政治史に拠っていた。拙編著『ベネッセ全訳古語辞典改訂版』(二〇〇七年)では、文献成立年をもって時代区分を括りはしたが、政治史に拠ることに変わりはない。ここではその時代区分枠を借りた、ということである。
- (8) 当時、筆者は、学校図書「中学校国語」の教授資料執筆協力者として、作問原案の提出などもさせていたにいたっていた。その折、白石大二論文の動詞に接する補充成分の格について併せ提案したが、中学生には難度が高いとされたりなどがあって、旧稿では、認識が不十分なまま、どちらも0格としてしまっていたようである。なお、小稿七章において、いま一度、この件について触れることとする。
- (9) その「おち・いる」のブランチ④の語釈からは、「城が陥る」などの存在が想定されるが、出典ある用例は発掘されいかなかった。
- (10) 国語動詞の抽象語義化現象の要因について、筆者は、旧稿執筆の段階

から、上接する抽象概念名詞・名詞句と格助詞とによるものと見ていたが、その姿勢を明確に示してはいなかった。その後のある時期から、そのような(動詞の抽象語義化現象)について論じた著作や論考の検索に努めている。例えば、大谷伊都子「動詞「つける」の用法」抽象事を表す語との結びつきから―(『国語語彙史の研究』八)和泉書院/昭和六十二年) / 西田隆政「動詞「のぶ」をめぐる―動詞の用法と意味特徴―」(『国語語彙史の研究』十三)和泉書院/平成五年)などが、その関係論考である。

- (11) 拙稿「非動作性二字漢語/訓なし一字漢字/カタカナ外来語略語形+接尾辞「化」サ変複合動詞の時代―連体修飾語としての「欲望する」型する」(『キャラ化する』―(『國學院雑誌』第一一九卷十一号/平成三十年十一月)。